hito*yume インタビュー

巻頭特集

尾木 直樹

硬派な報道番組からバラエティ番組まで、引っ張りだこ。
人気の秘密は、「おねえキャラ」ともいわれる独特の雰囲気ばかりでなく、
温かく、ときに熱く、ときに厳しく、歯に衣着せぬ発言の数々が、広く支持されているからでしょう。
そんな「尾木ママ」に、子ども時代の思い出や、かつての教え子との交わり、
さらに、現在の教育現場への思いなどを伺いました。

【おぎ なおき】
1947年滋賀県生まれ。早稲田大学卒業後、私立海城高校、東京都公立中学校教師として、22年間子どもを主役としたユニークで創造的な教育実践を展開。その後、臨床教育研究所「虹」を設立し、子どもと教育などに関する調査・研究活動に取り組む。2003年に法政大学キャリアデザイン学部教授に着任。2012年4月からは法政大学教職課程センター長・教授に就任。政府、自治体の諮問委員としても活躍。近年は、情報・バラエティ番組などにも多数出演し、「尾木ママ」の愛称で幼児からお年寄りにまで親しまれている。著書多数。

印刷テクノロジーで、世界を変える。TOPPAN

電子書籍の未来が育ち始めています。

お気に入りの雑誌や小説、人気の写真集や話題のエッセイ、
本は私たちを楽しませてくれる大切な存在です。
そんな本とのつきあい方がいま変わり始めています。
スマートフォンやタブレットで身近になってきた電子書籍の世界。
意外と知られていないその裏側をのぞいてみましょう。

⑤ 読者

④ 電子書籍をインターネット等で販売

BookLive! 本とみなさまを結ぶ 電子書籍の本屋さん

BookLive! は、町の本屋さんのように本を探す楽しさを大切にした電子書店です。いろいろな端末から読めたり、ネット上に書庫が持てたり、使いやすさの追求はもちろん、様々なキャンペーンを実施する等、楽しい電子書籍ライフを叶えるサービスを提供しています。オリジナルの電子書籍専用端末「BookLive!Reader Lideo（リディオ）」を発売し、更に快適な電子書籍環境を提供します。

http://booklive.jp/

電子書店 Ⓐ　電子書店 Ⓑ

③ 電子書籍を電子書店へ提供

Bitway いろいろな電子書籍を電子書店へ提供しています

ビットウェイは、書籍・コミック・写真集の分野で国内最大級のコンテンツ数を誇り、たくさんの出版社や電子書籍ストアと私たちユーザーとの出会いを支えている電子書籍の取次サービスを展開しています。

http://www.bitway.co.jp/

② 本を電子書籍へ変換し、具体的なビジネスへ展開

TOPPAN 3つの力で電子書籍の未来をサポート

たくさんの可能性がつまった電子書籍の世界。トッパンは、テクノロジー×クリエイティブ×プランニングの3つの力で、もっともっと楽しい電子書籍の未来を叶えていきます。

1. テクノロジー
あらゆる本を電子書籍に変換

本を印刷するだけでなく、電子書籍としても楽しめるように、最新のデジタル化技術を完備した「コンテンツファクトリー」が、本のおもしろさを支えています。

本の印刷や電子化に対応

2. クリエイティブ
本にあたらしい驚きを

紙でつくられたものをそのまま電子化するだけでなく、動く絵本や音の出る小説など電子書籍ならではのあたらしい楽しさをつくりだしています。

動きや音をつけて演出する

3. プランニング
電子書籍を一人でも多くの人へ

いろいろな会社とのつながりを持つトッパンが、ひとつの書籍が誰かの手元に届くまでのストーリーを考え、素敵な本との出会いを支えています。

電子書籍をビジネスの場へつなぐ

http://solution.toppan.co.jp/service/ebook.html/

① 本を企画

出版コンテンツ　出版コンテンツ　出版コンテンツ　出版コンテンツ　出版コンテンツ

凸版印刷株式会社　〒101-0024 東京都千代田区神田和泉町1番地　http://www.toppan.co.jp/

ぼくが子どもの頃の運動会は、村をあげての一大イベント。地域がみんなで子どもを育てていたのね。

担任の先生から「尾木君、頼むよ」なんて、頼りにされていたの。

「尾木先生」というより「尾木ママ」とお呼びしたほうがしっくりくるような気がします。「尾木ママ」は、どんな少年時代を過ごされたのですか？

ぼくが生まれたのは滋賀県の伊吹村という小さな村です。今は合併で米原市になっていますが、山奥の村で県内で最後まで電気が来なかった村です。ランプのホヤ磨きをしてお小遣いをもらったりしていました。

小学校の思い出でいちばん印象に残っているのは「ウサギ狩り」ね。学校行事なんです。みんなで手をつないで学校裏の雑木林を囲み、上級生がバケツをたたきながら野ウサギを追い込んでいくんです。楽しかったですよ。

ただ、捕ったウサギをどうしたのかがわからないんです。大人たちが「先生方があとでウサギ汁にして食べているに違いない」なんて話しているのを聞いて「先生いいなぁ、うらやましいなぁ」なんて思ってました（笑）。

これって、今だったら問題になってしまうかもしれませんよね。でも、本当にウサギ汁にして先生たちで食べていたのかどうかは別として、当時はそういったことにもあまり目くじら立てない雰囲気がありましたね。

そもそも学校や学校の先生と、地域社会との関係が、当時と今とでは大きく違っています。

例えば運動会。ぼくが通った小学校では、子どもとその親だけの催し物じゃなくて、地域の大人たちがみんな参加する、村をあげての一大イベント。自分の家族、親戚の子どもが出ているかどうかなんてことは関係なく、盛り上がるの。地域と学校との関係がそれだけ濃密で、地域がみんなで子どもを育てていたのね。

実はぼくは、学校に宿直室を復活させたらいいんじゃないかと思うことがあります。

かつてはどこの学校にも宿直室があって、先生たちが交代で泊り込んでいました。村の人たちがそこに差し入れを持って行くということも、珍しくなかったんですね。ぼくの姉も親に言われて卵を届けに行ったりしていました。

もちろんこれは、付け届けとかそういうことじゃなくて、日頃の感謝の気持ちをちょっと表したというだけのこと。学校や学校の先生たちと「生活」の中で関わっていたんですね。

もちろん当時と今とでは社会の状況も大きく変わっているし、あの頃の宿直の習慣をそのまま復活させることはできません。それに、単純に宿直室を置いて先生が交代で泊まるシステムをつくればいいということではありません。

ただ、地域社会と学校との関係をもう一度見直すことは、子どもたちにとっても先生たちにとっても、すごく意味のあることだと思います。

「学校と地域社会との関係を見直すことは、すごく意味のあること。例えば、学校に宿直室を復活させてもいいのでは。」

小学校時代、勉強はいかがでしたか？

滋賀県の伊吹村（現在の米原市）で育った少年時代の尾木ママ。

国語が得意でしたね。文章を書くのが小さい頃から好きだったんですが、小学校の教師をしていた母が、いろいろアドバイスをしてくれるんです。「よく書けているけど、この『山々です。』のところは、『山々。』で切っちゃってもいいんじゃない」なんて。その通りにしてみると、なんかいい感じがする。ああ、文章を書くのっておもしろいなあって、もっと書くようになって。小学校五、六年生のときには、夏休みに毎日、詩を二〜三編ずつ書きためて、自分の詩集をつくっていました。

私は、国語の力は書くことによって養われると考えています。文章を書くことによって、読む力、感じる心、ものごとを見る目が育ちます。これが国語の力につながっていくのです。とはいえ、小学生の頃にはそんなことはわかりませんでしたけれどね。

そういえば、五、六年生のときに、ぼくが通っていた小学校が、国語の研究指定校になったんです。ほかの学校の先生や、県や、おそらく文部省などの偉い方々が何度も授業を見に来られたんだけど、研究授業の日になると、担任の先生が「尾木君、よろしく頼むよ」なんて言うんです。授業の内容を前もって教えてくれたりするわけじゃないんだけど、「頼りにしてるよ」っていう感じです。

いざ授業になって、「これ、わかる人……」なんて先生が言っても誰も答えられなかったりするでしょ。ぼくの出番だなって、サッと手を挙げて答えると、先生がうれしそうにするし、それだけじゃなくて、授業を見に来ている人たちからも「おお」なんて、どよめきがもれたりして、けっこうそれが快感でしたね。それでますます国語が好きになって。

子どもって、そういうところがあると思うんですよね。みんなの前でほめられると、普通にほめられた以上にうれしいんです。自信もやる気もますますアップする。ほめて伸ばすっていいますが、学校の先生はそういう子どもの心理をうまく使うといいんじゃないでしょうか。

ある番組に出演したら、キャスター、プロデューサー、ADの3人が教え子だったんですよ。

高校と中学校で合計22年間、教壇に立たれました。どんな先生だったのですか？

ぼくは大学を卒業したあと、ある私立高校の教師として教壇に立ちました。日本の未来を切り開く高校生を育てるんだという熱い思いがあって、まるで「金八先生」か、それ以上だったと思います。

教科は国語でしたけれども、それよりも、ものの見方、とらえ方、考え方を教えるんだという気持ちのほうが強かったですね。さまざまなことについて、生徒たちとずいぶん議論もしました。

今でも私が新卒で入った、教師1年目のときの教え子に会うことがありますが、「先生からものすごい影響を受けた」と言ってくれます。私は高校

コラム　ヤンチャだった少年時代

ぼくはいつもふざけてばかりいる子どもでした。小学校1年生のとき、ふざけ過ぎて、教室の前の教壇のところに立たされてしまいました。でも、しばらく立っていると疲れてきて、教壇に座ってしまったんです。ふと見ると、横に先生のスカートが見えたので、スカートの中をのぞいたのね。もう、怒られた怒られた。先生はわざわざ私を職員室まで抱えていって、職員室に立っていなさいって。さすがに恥ずかしかったですね（笑）。でも本心ではなんで楽しいことをしただけなのに、こんなに怒られなきゃならないんだろうって思ってました。

今でもぼくは冗談を言ったりすることが大好き。子どもの頃とちっとも変わっていないんです。

と、そのあと、公立の中学校でたくさんの子どもたちを教えてきましたが、新卒のときの子どもたちがやっぱりいちばん印象に残っていますし、「先生の影響を受けたよ」と言ってもらえるのも、その新卒のときの教え子たちからというのが、最も多いように感じます。

学校の先生って経験の積み重ねが大切だって言いますよね。確かにそういう面もあるとは思いますが、子どもたちへの影響力ということを考えたときには、経験豊富な先生だから、あるいはベテランの先生だから影響力が大きいっていうことじゃないんですね。経験や年数の長さではなく、何かを伝えたいっていう思いの強さが大切なんだなと思います。

先日ある報道番組に出演したのですが、そのときのキャスターの女性は私が中学の教師をしていたときの教え子。学級委員だったことを覚えています。久しぶりに会ってうれしいような照れくさいような思いをしたのですが、それだけでは終わりませんでした。番組のプロデューサーが私立高校勤務時代の教え子、さらにスタジオでがんばっているADさんは、私が今教えている大学の教え子だったことがわかったのです。全くの偶然です。何だか年代を超えた同窓会のようで、とても驚きました。

そのキャスターになった彼女から言われて思い出したのですが、私は中学校で教えていたとき、生徒の十五歳の誕生日に本をプレゼントしていました。翌月に誕生日を迎える生徒の名前を手帳に書いておき、どんな本を贈ったらいいか、一カ月かけて考えるのです。あの子は失恋したばかりだから愛について書いた本がいいかな、もっと違う本がいいかな、などと、一人ひとりに合った本を、一生懸命選んでいました。今から思えば、それが生徒を理解することにもつながっていたように思います。

誰にどんな本を贈ったのか、残念ながらもう覚えていませんが、彼女には「十五歳おめでとう。自らの限界に挑戦してください。」というメッセージを添えて、五十三歳になって夜間中学に入学した人のドキュメンタリーの本を贈ったそうです。彼女は、「みんな楽しそうな本をもらっているのに、どうして私にはこんな暗い本?」と当時不満だったそうです。彼女は大学卒業後に新聞記者となり、今はキャスターとしても活躍されていますが、私がプレゼントした本の影響も少しはあったのかな、などと思っています。

公立中学校での教員時代。国語を教えていたが、それ以上にものの見方、とらえ方、考え方を伝えることを大切にしていた。

学校は今、「博物館」になってしまっていると思います。

教育評論家としての活動をされている目的の一つに、教育現場と一般社会の常識や認識のズレをなくしたいというお考えがあるそうですね。

「学校の常識は社会の非常識」と言われてしまうほどですからね。学校とそれを取り巻く社会とのズレが生じてしまっていると思います。

その原因の一つは、インターネットの発達と社会のグローバル化です。かつて学校や先生は地域の文化的な拠点であり、中心的な担い手でした。わからないことがあると、学校の先生を頼ったものです。そこに、地域の人々と教師との交流も生まれました。

ところがインターネットの発達によって、人々はどんどん容易に、多くの情報を自分で手に入れるようになってきました。しかも、社会のグローバル化が進んだことで、例えばラーメン屋のおじさんが、為替相場に関心をもつのが当たり前になってきました。麺の材料となる小麦価格の変動を見極めなければならないからです。

一方の学校では、先生方は忙しく、なかなか最新情報をチェックできません。学校以外の社会体験をしたことのある先生も少数派でしょう。これだけでも学校と社会とのズレが生じてしまっているのですが、それに加えて学校では、先生と子どもたちという関係の中で一つの世界ができあがってしまっているということも影響しています。ラーメン屋のおじさんは、世界情勢の変化を知る必要に迫られていますが、学校では、目の前の勉強をどうするのかということばかりが優先されるからです。

私は、学校は今、「博物館」になってしまっていると思います。社会はどんどん変化しているのに、学校の中だけが、以前の価値観のままだからです。

この状況を打ち破るには、教師と親と地域とが一体になって教育をつくりあげていくことが大切だと思います。その交流を図る中で、教師は社会を知り、親と教師との信頼関係もできてくると思います。ときには教師が、親から文句を言われることもあるかもしれない。でもそれは、いわゆるモンスターペアレントのクレームとは全く別のもの。学校や教育をよくしたいという思いから出た、貴重な意見です。

文部科学省も学校支援地域本部という制度をつくり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを進めています。できればその速度をもっともっと上げて、全ての学校で実現すればいいのになと願っています。

冒頭で、学校の宿直室を復活させては、という話をしましたが、それも根っこは同じこと。学校に泊まることが目的なんじゃなくて、いつもそこに誰かしら先生がいることで、地域の人たちとの結びつきが再構築されるんじゃないかな、と思うからです。

学校の外には、さまざまな知恵もたくさんあるはずです。そういったことも積極的に取り入れていくことが大切なのではないでしょうか。

「社会はどんどん変化しているのに、学校の中は以前の価値観のまま。学校は過去の遺物を展示する『博物館』になってしまっているのではないでしょうか。」